

2025 年 5 月 11 日（日）「赤裸々な祈り」

ヨブ記 3:1-26

1 この後、ヨブは口を開いて、自分の生まれた日を呪った。

2 ヨブは言った。

《生まれた日を軽んずる》

3 私の生まれた日は消えうせよ。男の子を身ごもったと告げられた夜も。

4 その日は闇となれ。高みにおられる神が顧みず、光もその日を照らすな。

5 その日は闇と死の陰に贖われ、雲に覆われ、日を暗くするものに脅かされよ。

6 その夜は暗闇に捕らえられ、年の日々を楽しまず、月々の数に加えられるな。

7 その夜は不妊となり、喜びの声も上がるな。

8 日を呪う者、レビヤタンを呼び起こすことのできる者が、これを呪え。

9 タベの星も暗くなれ。その夜は、待ち望んでも光は射さず、夜明けのまばたきも見えないように。

10 それが私を宿した胎の戸を閉ざさず、私の目から労苦を隠さなかったからだ。

《生まれてこなければよかった》

11 なぜ、私は胎の中で死ななかったのか。腹から出て、息絶えなかったのか。

12 どうして、両膝が私を受け止めたのか。なぜ、私に吸わせる乳房があったのか。

13 それさえなければ、今頃、私は横たわって憩い、眠って休息を得ていたであろうに。

14 自分たちのために廃虚を築き直した、地の王や参議と共に、

15 あるいは、金を集め、その館を銀で満たした、高官たちと共にいたことだろう。

16 なぜ、私は葬り去られた死産の子、光を見ない子のようならなかったのか。

17 そこでは、悪しき者も暴れることをやめ、そこでは、力尽きた者も憩いを得る。

18 捕らわれた者も共に安らぎ、追い使う者の声も聞かない。

19 小さな者も大きな者もそこにおり、奴隷も主人から解き放たれる。

《死にたくても死ねず》

20 なぜ、労苦する者に光を与え、魂の苦しむ者に命を与えるのか。

21 死を待ち望んでも、それは来ない。彼らは隠された宝よりも死を求めている。

22 彼らが躍り上がるほどの喜びに溢れるのは、墓を見いだしたとき。

23 行くべき道が隠されている者に、神はなお垣根を巡らす。

24 日々のパンの代わりに嘆きが来る。水のように呻きはほとばしる。

25 恐れていたことが私に起こった。恐怖が私を捕らえた。

26 私は安らかではなく、憩うことはない。私に休息はなく、心は乱されている。

【序論】

ヨブ記は「祈りとは何であるか」を教えている書でもあります。ヨブの激しい言葉を聞くとき、読者は「こんなことまで言って大丈夫なの？」という思いになるでしょう。事実、ヨブの友人たちにとってヨブの発言は聞くに堪えないものでした。だから彼らは横槍を入れるのです。しかし、本書全体を通じてヨブが百以上の問いを神に投げつけたとしても、神とヨブの関係が壊れていない点に注目すべきでしょう。しかもヨブの中にある神への畏れは最初から最後まで失われていません。その前提の中でヨブは大胆に神に叫んでいます。この視点を持つとき、ヨブは「真の祈りをささげている」ことが分かります。そして、私たちは果たして彼のように神と向き合うことができるかが問われているのです。ヨブはどこまでも真剣に神と対峙していました。これほどまでに赤裸々な心の叫びを一度でも神にぶつけたことがあるでしょうか。私たちは今日の箇所から「真の祈り」を学ぶことになりま

【本論】

この後、ヨブは口を開いて、自分の生まれた日を呪った。ヨブは言った。(3:1-2)

七日七夜ヨブの傍で黙していた友人たち。ヨブの変わり果てた姿を見て、誰一人として声を挙げることもできないほどの衝撃を受け、永遠とも思える沈黙が続いていました。その沈黙をついに破ったのはヨブでした。彼はブツブツと独り言を語り始めるのですが、その声は天に向けられています。彼に命を与えた方に向かって、自分の心の思いを打ち明け始めたのです。ここでは「呪った」という訳になっていますが、原語の「カーラル」は「軽蔑すべきものとする」という意味で、「呪う」はやや強すぎる訳かもしれません。

本論 1. 生まれた日を軽んずる (3:3-10)

私の生まれた日は消えうせよ。男の子を身ごもったと告げられた夜も。その日は闇となれ。高みにおられる神が顧みず、光もその日を照らすな。その日は闇と死の陰に贖われ、雲に覆われ、日を暗くするものに脅かされよ。その夜は暗闇に捕らえられ、年の日々を楽しまず、月々の数に加えられるな。その夜は不妊となり、喜びの声も上がるな。日を呪う者、レビヤタンを呼び起こすことのできる者が、これを呪え。タベの星も暗くなれ。その夜は、待ち望んでも光は射さず、夜明けのまばたきも見えないように。それが私を宿した胎の戸を閉ざさず、私の目から労苦を隠さなかったからだ。(3:3-10)

ヨブは、自分が生まれた日そのものがなかったことにしてほしいと語ります。「その日」「その夜」と繰り返しながら、彼は自らの存在の根源を否定するような言葉を並べます。「レ

ビヤタン」や「夕べの星」など詩的な表現を用いて、彼は自らの人生の始まりを暗闇と混沌のうちに消し去りたいと願っていました¹。

人は誰もが「産み落とされる」ものであり、自分の意志で生まれてきた人はいません。それだけに、親は子に幸せな人生をと願います。しかしヨブは、自分の誕生日だけでなく、身ごもったと告げられた夜までも消してほしいと叫んだのです。

本論 2. 生まれてこなければよかった (3:11-19)

なぜ、私は胎の中で死ななかったのか。腹から出て、息絶えなかったのか。どうして、両膝が私を受け止めたのか。なぜ、私に吸わせる乳房があったのか。それさえなければ、今頃、私は横たわって憩い、眠って休息を得ていたであろうに。自分たちのために廃虚を築き直した、地の王や参議と共に、あるいは、金を集め、その館を銀で満たした、高官たちと共にいたことだろう。なぜ、私は葬り去られた死産の子、光を見ない子のようなにならなかったのか。そこでは、悪しき者も暴れることをやめ、そこでは、力尽きた者も憩いを得る。捕らわれた者も共に安らぎ、追いつく者の声も聞かない。小さな者も大きな者もそこにおり、奴隷も主人から解き放たれる。(3:11-19)

今度はヨブ、自分が母の胎内で息絶えていればよかったと語り出します。仮に生まれたとしても、母が授乳してくれなければ、自分は生き延びなかった。ならば、あの時に命が絶たれていれば……。² 彼が語る「陰府」は、当時の世界観において、すべての人が等しく休む場所。差別もなく、苦しみも争いもない。ただ眠るような場所。そこに行けていたらよかったのにとヨブは願います。死産で生まれてくる方がよかった、とまで言います。

そして彼は「地の王」「高官たち」「奴隷」「捕らわれ人」といった多様な立場の人々を挙げ、死後は身分の差が消える世界に憧れを持ちます³。この嘆きは、コヘレトの言葉とも響き合います。

¹ 「レビヤタン」とは原始的混沌を表すウガリット神話に登場する水の怪物で、それが太陽や月に巻きつくことで日食や月食が起きると考えられていた。41 章では「ワニ」に似た生物として再び登場するが、イザヤ 27:1 では「曲がりくねる蛇レビヤタン」とも表現されている。「夕べの星も暗くなれ」とは、いつまでも夜が明けることがなく、ヨブが生まれた日が始まらないようにという意味。

² 「両膝が私を受け止めた」とは、生まれた赤ちゃんを膝の上で抱き自分の子として認めることを意味するのだろう。

³ ここでヨブは、何種類かの人間を挙げている。「地の王」「参議」「高官たち」とは、地上で権力を持っていた人々で、ヨブもその部類に入っていたと思われる。上流階級で交流があった人々で、ヨブより先に世を去った事例があったのだろう。ヨブは彼らが苦しみのない世界へ行ったことを心底羨ましく思っていた。一方、「悪しき者」「力尽きた者」「捕らわれた者」「奴隷」とは、身分の低い者たちのこと。彼らも地上では苦しんだが、ヨブのように生き続けていないから幸いだと言いたいのだろう。

今なお生きている人たちよりも、すでに死んだ人たちを私はたたえる。いや、その両者よりも
幸せなのは、まだ生まれていない人たちである。(コヘレト 4:2-3)

本論 3. 死にたくても死ねず (3:20-26)

なぜ、労苦する者に光を与え、魂の苦しむ者に命を与えるのか。死を待ち望んでも、それは
来ない。彼らは隠された宝よりも死を求めている。彼らが躍り上がるほどの喜びに溢れるの
は、墓を見いだしたとき。行くべき道が隠されている者に、神はなお垣根を巡らす。日々のパ
ンの代わりに嘆きが来る。水のように呻きはほとばしる。恐れていたことが私に起こった。恐
怖が私を捕らえた。私は安らかではなく、憩うことはない。私に休息はなく、心は乱されている。
(3:20-26)

ヨブは心底から死を求めています。しかし神はそれを許されない。彼は苦しみながらも、
命を絶つことはせず、神の主権を認め続けているのです。ヨブは、苦しんでいるのは自分だ
けでないことも認めています。「**労苦する者**」「**魂の苦しむ者**」が希望なく生き続けている姿
を見てきました。

現代にも、ヨブのように「苦しむために生まれてきた」と感じる人々がいます。たとえば、
インドに残る「カースト制度⁴」では、生まれた瞬間に将来が決められ、差別や貧困、暴力
の連鎖に晒される人たちがいます。彼らの生に希望はあるのか、と私たちは問われます。

ヨブは今や疎外され、社会の片隅で孤独に呻く者となっています。

神は私から兄弟を遠ざけ、知人たちもまた私から離れて行った。私の親族も身を引き、友人
たちも私を忘れた。私の家に身を寄せる者たち、私の仕え女たちも私を見知らぬ者と見なし、
彼らの目に私はよそ者となった。私の僕は、呼びかけても答えず、私は自分の口で彼に憐れ
みを乞う。私の息はわが妻に嫌がられ、わが母の子らにも私は嫌われる。幼い子どもさえ私
を拒み、私が立ち上がると、私に口答える。親しい仲間たちは皆、私を忌み嫌い、愛してい
た者たちも私に背を向ける。(19:13-19)

⁴ 「カースト」(Caste) とは、社会における人々の階層的な区分を指し、インドをはじめとする
南アジアの一部の国々で見られる社会制度。この制度は、主に「生まれ」によって人々を特定の
社会的地位に分け、各カーストの人々は一定の職業、結婚相手、居住地などが限定されるという
特徴がある。インドの伝統的なカースト制度では、上位から「ブラフミン」「クシャトリヤ」「ヴ
ァイシャ」「シュードラ」「ダリット」という階層があり、最下層の「ダリット」に生まれてくる
人々は、従事できる職業が制限され、社会的差別を受けることが多い。他のカーストと関わるこ
とが禁じられ、上位カーストの人々と一緒に食事をすることも許されず、日常的に侮辱や蔑視を
受け、教育を受ける機会が制限され、肉体労働や低賃金の仕事を強いられ、昇進のチャンスはな
く、宗教的な儀式や祭りにも参加できず、貧困に苦しみ、暴力や性的虐待のリスクに常に晒され
ている。この生活環境は世代を超えて継続していくため、まさに「苦しむために」生まれてくる
ような人々と言える。生まれつきそういう環境で生きなくてはならないため、低カーストの人々
は自己肯定感が低く、精神的にも不安定である。

彼の叫びは、今も苦しみの中にある多くの人々の声と重なります。だからこそ、この言葉は私たちにも響くのです。

【展開】

今日は、長い沈黙を破って語り始めたヨブの中の真実の思いに耳を傾けました。一見、ただただ自分が直面している悲惨さと人生の無情さを並べ立てているようですが、読者が見落としてはならないポイントがあります。それは第一に、彼が自分の生まれた日を軽んずることはしても、神を軽んじはしなかったということです。神の主権の下で自分の人生に臨んだ悲劇を見ても尚、「神はおられない」とは言わなかったのです。第二に、彼は死を慕い求めながらも、自ら命を絶つことはせず、自分の命の主権は神にあることを認め続けていました。ここでの嘆きは、自分の人生の主権を握っておられる方が決定されることに対して、抵抗できない自分の無力さを語っています。その上で、神に従って生きてきた自分に下された悲劇の理不尽さを訴えているのです。

【結論】

今日のヨブの言葉の数々は、到底「祈り」とは聞き取れないかもしれません。しかし、彼は神の主権を認めながら真実の心の叫びを訴え始めたのです。彼の言葉には偽りがなく、何一つ取り繕うことはありません。自分が語る前に、神が自分の思いをすべてご存じであることも彼は知っているのです。そして、自分の叫びを神が真正面から受け止めてくださることも知っていました。それゆえに、私はこの第3章の嘆きを「祈り」として捉えています。神に信頼していなければ、このように真実に語ることはできないからです。そして、このことは読者に、神への畏れを持っているのであれば、正面からぶつかっていいことを教えています。私たちも神の懐の大きさを信じ、心の奥底にある真実の思いを神の御前に打ち明けてみたい。そのような祈りこそが神の心を動かすのです。

【祈り】

人の心の思いをすべてご存じであられる天の父なる神様。私たちは祈るとき、どこか取り繕ってしまう傾向があり、自分の心の真実をどこまで御前に打ち明けてよいか、迷うものです。しかし、ヨブの祈りは違いました。彼はあなたを信頼していたがゆえに、自分の心の思いをオープンにすることを恐れなかったのです。私たちも、彼のような「真実な祈り」がささげられるようになることを願います。私たちを細胞レベルまでご存じであられるあなたに信頼して、生きていくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
苦しみある世に生きるすべての人に、やさしき眼差しを向けておられる、主イエス・キリストの恵み、
ヨブの真実の祈りに耳を傾け、そのすべての言葉を受け止めてくださった、父なる神の愛、
自分の心の声に気づかせ、恐れることなく神の御前に打ち明けさせてくださる、聖霊の親しき交わりが、
この場にいるすべての方々の上に、これからも変わらずありますように。